



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.163

2017.4.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

● 神村 透

田舎考古学人回想誌

54

「峠を越えてもう一つの木曽川がある 榎川中学校に(H36 1991~94)」

木曽郡は木曽川上流部の町村でなっている。西筑摩郡といわれていた頃は最上流部で境峠を越えて梓川の支流奈川の奈川村(現松本市)と鳥居峠を越えて奈良井川の榎川村(現塩尻市)が木曽郡であった。中世の木曽氏の勢力範囲にあったためである。奈川村は早くに木曽郡から離脱し南安曇郡に、榎川村は平成の大合併で塩尻市と合併した。私は定年前の最終学校を何処に希望するかと校長から話があったとき、木曽では北部・中部・南部と学校区分があり私は南部の経験が無かったが、それよりも峠の向こうをと榎川中学校を希望した。授業で生徒に接して驚いたのは木曽郡の中心地である福島町のことを殆ど知らないことでした。彼等にとっての生活領域は峠の南向こうの福島ではなく、奈良井川の下流に広がる松本平で塩尻市・松本市が領域でした。もう一つは奈良井川の両岸に山が迫り平地が無いいためか水田が僅かしかなく、稲を知らない生徒が殆どでした。中山道は塩尻宿から洗馬・本山宿を通り桜沢の峡谷から木曽に入る。その境界に『是より南木曽路』の石碑が立つ。ここから南の馬籠宿の南端の新茶屋に『是より北木曽路』の石碑があって、この間11宿が木曽路として知られていた。

松本平の人達は奈良井川が木曽の山から流れてきているからと木曽川と呼んでいた。そしてどちらかという旧宗賀村までは松本平と言うが、その奥の榎川村は松本平から区別して見ている。それが榎川村の人達には歯痒い想いだった。だから平成の大合併では逸早く塩尻市に合併した。松本平から見ると奈良井川の谷筋が奥へと誘っている。平沢辺りから正面に山が深くV字状に落ち

込んだ鳥居峠が見え、奈良井宿から中山道は一気に峠に登り木曽川沿いの敷原宿に下りている。木曽からは鳥居峠は全く見えない。この峠越えは松本平からの進出する人達によって開かれた。それは旧石器時代からの人・文物の往来から知

られている。榎川村の遺跡は規模が小さく数が少ないが、木曽の遺跡出土の遺物を見ると松本平からの進出を示すものが非常に多い。私も『鳥居峠の向こう』と題して平出考古博物館で話した。

榎川村にはもう一つ重要な峠がある。奈良井川のさらに上流の木曽駒からの支流を上がると伊那谷と結ぶ権兵衛峠がある。この峠も上伊那から見ると中央アルプス駒ヶ岳の北外れの尾根が落ち込む峠が見える。木曽へは権兵衛峠と姥神峠を越えなければならない。これも木曽からの開削ではなく伊那からの開削である。鳥居峠ほど往来を示す遺物はないが、御子柴遺跡出土の下呂石製の大型石槍は木曽から運ばれてきたものである。どんな奥深い峠も川を遡上した人々によって峠越えがされていた。

江戸時代通常的に米不足の木曽では、伊那の米を求めていた。より多くの販入をと峠道の牛馬が通れるように改修したのが牛方親方の権兵衛で、峠と街道を権兵衛の名をつけた。峠下に作られた関所を調査したら伊那の縄文中期後半の土器片が出土し、鳥居峠程ではないが交流が認められた。

中山道が整備されたときは岡谷から小野に出て牛首峠を越えて木曽に通じていた。間もなく道は塩尻峠越えに変更された。牛首峠はその後余り利用されていなかった。木曽の弥生後期の土器を見ると上伊那郡辰野町・岡谷市を中心に分布する橋原式土器であるので、牛首峠を越えての往来があった。

峠を越えた榎川村での体験で私は峠の持つ重要性を知った。信州のような山に囲まれ、幾つもの山で隔てられた小地域が連続し結ばれている所では、それぞれを結ぶ峠が旧石器時代から人々に利用され、文物や情報が行き来している。地域の遺物を見たとき、その在地性や他地域からの搬入かの捉えに研究者としての見識を持たねばいけないと痛感した。それだけに周辺地域の土器をしっかりと理解しなければならない。

※巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。

目次

■田舎考古学人回想誌 峠を越えてもう一つの木曽川がある榎川中学校に 神村 透 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイスレット・サイト(第156回) 森原明廣 …3
■考古学の履歴書 過ぎし日の軌跡-女として考古学研究者として-(第17回) 岡田淳子 …2	■考古学者の書棚 「家康、江戸を建てる」 渡邊理伊知 …4



▲榎川中学からみた鳥居峠

考古学の履歴書

過ぎし日の軌跡 —女として考古学研究者として—(第17回) 岡田 淳子

①大学構内の遺跡調査を手伝う

北海道大学は敷地が広く、遺跡の多い日本では当然のこととして、工事の度に遺跡を壊すことになる。北の一角を「遺跡庭園」として整備したが、構内を南から北へ貫通する1kmを超える中央通り周辺の調査は、札幌市教委の埋蔵文化財調査室によって行われていた。

私は、正門に近い南の研究室から北にある教養部の講義棟まで、実物教材を携えて自分の車で往復した。顔見知りの埋蔵文化財担当の市職員が力のない私の車を、「押さなければだめだろう」と予想していた。

やがて、札幌市内の工事が立て込んできて、北大構内は北大に任せようということになったという。有能かどうかは別にして、教職員の中に考古学協会員が5人もいたので、当然だったかもしれない。本部を掌握している事務長と学長から依頼があって、私たちは構内の発掘調査に従事することになった。「北海道大学埋蔵文化財調査室」ができ、発掘調査専属の専任人事も進み、院生等発掘作業のアルバイトを募集して、教員は専門性を生かして空き時間に手伝うということで決着した。

調査は構内中央部のメム(水源)から広がる擦文文化の住居跡群が主で、その年の調査は無事に終了した。ところが再び学長に呼び出され、「恵迪寮」の名で名高い学生寮再建の予算が通り、期限内に建築物を建てなければならないという。北海道の冬は殊更に厳しく、深い雪に覆われて発掘調査には向かない。しかし時間は限られていた。

土木工学専門の当時の学長は、どうすれば冬に発掘調査ができるかを一緒に考え、調査区域に横まで覆う巨大なテントを設営し、灯油ストーブで中を温めて、冬を通して発掘調査ができる準備を整えた。道内の発掘担当者たちからは、「そんなことが通常行われるようになったら大変だ」と^{ひしこく}鬱鬱を買ったが、テント内の発掘調査は比較的心地よく続けられた。1982年に始められた一連の調査は、1987年に一応の決着を見た。

報告書は、『北大構内の遺跡』として、1から5までの五冊と、それとは別に恵迪寮部分の発掘が、『サクシュコトニ川遺跡 —北海道大学構内で発掘された西暦9世紀代の原初的農耕集落—』として(1)本文編、(2)図版編の二冊にまとめられた。いずれも有江幹男学長によって「序」が書かれている。

この集落遺跡は、明治25～6年ころすでに発見され、高畑宜一氏によって『旧琴似川流域の竪穴住居跡分布図』として報告されていた。腐植土の堆積が遅い寒地ならではの竪穴の窪地を示したものである。この遺跡からは、蝦夷の「夷」の字を表したと思われる線刻のある坏や、腐蝕せずに残った木製の道具、流れに設置した木製の堰(テシ)なども発見されて、話題を呼んだ。ろくろ土師器の坏と擦文の甕との同時性も捉えることができ、私にとっては長いこと知りたかった土器形式の有様を目の当たりにした記念すべき遺跡でもあった。

後半は、発掘から分析まで理系の大学院生の手で行われたので、同一個体の土器破片が竪穴内外から散らばって発見される事実など、今まで知られなかった事実が細かく示されて学

ぶべきことも多かった。考古学を専門に学ぶ文系の院生とは違う視点で結果が導きだされたと言える。

この年、私はますます忙しくなっていた。女性の地位向上のためにと始めた「男性社会と女性」という講義が話題を呼び、さらに受講者数が増え、文部省から総合講義に取り上げられて、学外の公開講座も要請された。もともと坪井正五郎先生が日本に「人類学」を根付かせるために引き受けられたという「100回の講演」に倣って、頼まれると時間の融通がつく限り引き受けたので、暇の無い暮らしになっていった。上の娘が大学を卒業して東京の会社に勤め、下の娘が高校を終えてアメリカの大学に入学したので、子育てのタガが外れたからかも知れない。もちろん「アラスカ人類学調査」は続いていた。

私の人生はこれで良いのか。自問自答することが多くなり、夫と相談して勤めを替えることにした。そうすれば時間に余裕が出るだろうと思ったが、必ずしもそうは行かなかった。全学生が聴くような大教室での講義はなくなったが、私立大学に移るのを待っていたように、国立大学では許されない世間の様々な仕事を依頼され、時間的にはあまり変わらなかったように思う。

道立「女性プラザ」の初代館長(非常勤)になり、10周年には「北海道の女性」という本をまとめたりして、この仕事を13年続けた。また道庁が行う女性の海外研修の団長を務め、団員12人とともに3週間も北米(USAとカナダ)各地を回った。時間的に大変ではあったが、研究以外の収穫も多く、人生が豊かになったと感じている。

この他に、北海道教育委員会からの依頼で、「余市町大川遺跡」の発掘指導をすることになった。学生のとき私の調査に参加したという中村福彦さんが、北海道教委の文化財責任者になっていて依頼されたのであった。



▲9世紀の集落址内の流れに設置されていた堰

略歴

1932年	東京府豊多摩郡代々幡町(現渋谷区初台)に生まれる
1949年	東京都立第五高等学校 卒(学制改正)
1950年	東京都立富士高等学校 卒
1955年	明治大学文学部史学地理学科(考古学) 卒
1958年	東京大学大学院生物系研究科(人類学)修士修了
1961年	明治大学大学院文学研究科(史学)博士単位取得
1961～64年	東京都立武蔵野郷土館学芸員(常勤臨時職員)
1964～66年	米国ウィスコンシン大学人類学部 研究員
1967～77年	国立(クニタチ)音楽大学 専任教員
1978～88年	北海道大学理学部・文学部 専任教員
1988～2004年	北海道東海大学国際文化学部 専任教員(1998年より特任)
2010年～現在	北海道立北方民族博物館 館長(非常勤)

隔月連載です。次回は間壁忠彦先生・間壁葎子先生です。

Jレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 156

国史跡銚子塚古墳 ～山梨県甲府市下曾根町(旧中道町下曾根)～ 森原 明廣

誰しもが思うことであろうが、調査や保存整備を担当した遺跡は我が子のように愛しく、そこに優劣や順位を付すことは不可能である。本コラムの執筆依頼をお引き受けして、あらためてその感を強くした。一つだけ選ぶとしたら「マイ・フェイバレット」でありつつ、山梨を代表するような遺跡をセレクトするほかなかり。苦悶の末、ご紹介させていただくことにしたのは国史跡銚子塚古墳である。

銚子塚古墳は、山梨県甲府市下曾根町(旧中道町下曾根)に所在する。笛吹川左岸、太平洋側から最短距離で甲斐に至る中道往還が甲府盆地南東端に到達した地点に横たわる全長169mの前方後円墳は、言うまでも無く山梨県内最大であるとともに、築造期と考えられる4世紀後半段階においては、東日本最大級でもある。周辺には弥生後期～古墳前期にかけての方形周溝墓群(126基以上)である上の平遺跡、小平沢古墳(前方後方墳、45m)、銚子塚古墳に先行すると考えられる天神山古墳(前方後円墳、132m)や大丸山古墳(前方後円墳、120m)、銚子塚古墳に後出する丸山塚古墳(円墳、72m)がある。銚子塚古墳は甲斐の“古墳時代の曙”の地に存在する中核的な古墳であり、今なお、その威容を保ちながら甲斐風土記の丘・曾根丘陵公園の主として“君臨”している。

銚子塚古墳は昭和3年に偶然の機会から、後円部墳頂の割石小口積み竪穴式石室内から三角縁神人車馬鏡など複数の青銅鏡、車輪石や石釧などの石製品、貝釧、鉄剣、鉄刀、鉄斧など多量の副葬品が発見され、東京国立博物館に収蔵された。このことを契機に昭和5年には国史跡に指定され、その後は複数回の測量調査が行われた以外は未調査のまま保存されてきた。その後、昭和51年～昭和63年まで、県による公有地化や史跡公園整備事業が実施され、これに伴う試掘調査も部分的に行われた。この段階までの調査によって、銚子塚古墳は全長169m、後円部直径92m、後円部高15m、前方部幅68m、前方部高8.5mの規模であること、前方部先端が剣先状に突出する平面形の前方後円墳であること、後円部が3段築成、前方部が2段築成であること、墳丘段部には円筒形、朝顔形、壺形等の埴輪が樹立し、墳丘には葺石を伴うことなどが確認されている。また、墳丘相似形の周濠からは木製品やS字状口縁台付甕などが出土することも確認されていた。



▲銚子塚古墳周濠の木製品出土状況

筆者がこの古墳に関与したのは、平成8年以降に行われた県教委による後円部周辺の土地買い上げ事業担当およびその数年後に実施された追加整備のための試掘調査担当としてである。初めての土地買い上げ業務で流した苦い涙や苦心の数々などを胸に秘めながらの試掘調査は平成16年秋の台風シーズンから翌17年の積雪や凍結を伴う厳冬期に実施され、これまでの調査知見に加え、いくつかの新たな知見を得ることとなった。それらは古墳前期の東日本における大型前方後円墳築造の意味をあらためて問う内容であり、調査段階から大きな注目を集めた。

周濠については、周濠の外側にこれまで未確認であった外堤が存在する可能性を指摘することができたとともに、周濠内の土手状の区画堤の存在も確認された。さらには、後円部の一部が周濠内へ台状に突出する箇所(調査時には突出部と呼称した)の存在も確認され、4世紀代の畿内にある大型古墳との近似性も確認された。また、後円部墳丘端部の試掘調査では、墳丘端部から周濠までの間に約1.5～2m幅のテラス状の平坦面が存在することが確認された。このテラス状の平坦面の一部からは直径20cm、残存長90cmの木柱が土坑内に強固に据え立てられた状態で発見されている。用途や機能は不明ながら、古墳造営時の旧景を彷彿とさせる光景に目を奪われた記憶がある。

出土遺物の中で最も注目を集めたのは、後円部先端付近の周濠内から多量に出土した木製品であった。過去の調査でも出土していた有孔円盤状木製品、刀剣状木製品などに加え、長さ2.4mもある棒状木製品なども合わせて集中的に出土した。これらの木製品は、ホゾ穴の観察などから組み立て式(木製目釘固定)の製品であることが判明しており、火熱を受けた痕跡もあることなどから古墳周囲で執り行われた葬送儀礼に伴うものである可能性が指摘できた。また、これらの祭礼具的な木製品とは性格の異なる工具的なへら状木製品などがさらに下層(周濠最下層)から出土している。土層堆積状況の観察やそれぞれの層位出土資料から「古墳築造→工具状木製品を含む周濠内への土壌堆積→葬送儀礼などの実施と祭礼具状木製品を含む土壌堆積→埴輪片を含む墳丘の崩落土堆積」のプロセスも観察されるなど狭小な面積の試掘調査ではあったが数多くの成果が得られるとともに、将来的に解明すべき多くの課題も提示することとなった。

調査終了後、当該年度内に概報を発行した平成16年度を最後に文化財関連の他業務のために埋蔵文化財調査機関から離れて早くも12年が経過した。周濠部分とはいえ、東日本でも屈指の大型古墳である銚子塚古墳の調査に携わることができたことへの喜び、そして、これが人生最後の発掘調査担当遺跡とならないように願いつつ、たまに付近を通る際に車窓からひたすら墳丘を眺め、その都度、「やっぱり何度見ても大きいなあ」と思う古墳。それが“マイ・フェイバレット・銚子塚”なのである。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは山本哲也さんです。

考古学者の書棚

「家康、江戸を建てる」

門井慶喜／祥伝社(2016)

渡邊 理伊知

天正十八年(1590)の相州・石垣山山頂から本書の物語は始まる。ここで降伏寸前の小田原城を眺めながら、関白豊臣秀吉より関東への国替えを命じられた徳川家康は「関東には未来がある」としてこれを受け入れる。

本書は全五話から構成され、以下の通りとなる。

第一話 流れを変える

第二話 金貨を延べる

第三話 飲み水を引く

第四話 石垣を積む

第五話 天守を起こす

「第一話 流れを変える」は伊奈忠次・忠治・忠克が取り組んだ利根川東遷事業を取り上げる。家康が三河国から入府した頃の江戸は何本もの川が流れ込む水浸しの低湿地であった。家康は「江戸の地ならし」の差配に伊奈忠次を指名する。これに対して忠次は「江戸の地ならし」のための案として、「川そのものを、まげます。江戸へ流れこむ前に」と誰よりも雄大な意見を述べた。利根川東遷事業は文禄三年(1594)の会の川の締め切りからはじまり、承応三年(1654)の赤堀川の通水で一応の完成となる。実に60年、親から孫の代に亘って成し遂げられた大事業であった。

「第二話 金貨を延べる」は後藤庄三郎光次(橋本庄三郎)による慶長小判の鑄造に至るまでが描かれている。家康は庄三郎に対し、上方で流通する天正大判よりも良質の武蔵小判の鑄造を命じる。武蔵小判はあくまでも江戸とその周辺での使用を目的としたものであるが、天正大判よりも良質で、かつ大判よりも扱いやすい小判の登場は天正大判を駆逐しかねない、ということになる。すなわち武蔵小判の鑄造は家康が秀吉に対して通貨戦争を仕掛けるということの意味していた…

「第三話 飲み水を引く」は江戸二大上水の一つである神田上水の工事を行った大久保忠行(藤五郎)、内田六次郎の物語である。第一話では江戸に多くの河川が流入し、水浸しの低湿地であることから、川そのものを東遷させるという必要があったが、それとは別に江戸は海岸に近く海水はあるが清水が少ない。そこで、いずこから飲料水を引いてこなければならなかった。

天正十八年(1590)、家康は駿府城で藤五郎に江戸へ引く水を探す大役を命じる。藤五郎は「このお役目、拙者ひとりにお任せください。未来永劫、余人にはお命じられぬよう」と願い出て、家康は「大いによし」と快諾した。その後、藤五郎は「赤坂の溜池」、「神田明神山岸の細流」を水源として水道を江戸市中へ引くこととなる。しかし、慶長八年(1603)に家康は鷹狩りで訪れた武蔵野の地において在の者、内田六次郎の案内で「七井の池」(井の頭池)を見つけ六次郎を上水の普請役に命じるのだった。

「第四話 石垣を積む」は石切職人吾平と喜平太の物語である。関ヶ原の戦いに勝利した家康は江戸城の建設に着手する。代官頭である大久保長安は伊豆国の石工「見えずき吾平」の名を耳に入れ、江戸城の石垣のために石を切り出すように命じる。

「第五話 天守を起こす」では、第二代将軍秀忠が大御所家康に「江戸城に天守は要らない」と言い放つ。これに対し家康は

「一理あると思いつつも秀忠が見落としている天守の「ある機能」から、建設命令を出した。その一方で家康は江戸城の天守は白壁にするよう命じ、その意図を秀忠に問うが秀忠はなかなかその意味を読みとれず悩むのだった。

これらの話はあくまでフィクションとしてのものであるが、根幹は歴史学の研究成果に基づいたものといえよう。そこには文献史学だけではなく考古学による研究成果も含まれよう。

本書は江戸の開発をテーマとしている。開発と考古学には密接な関係があり、過去に何らかの開発が行われた痕跡が遺跡として現在に残る。そして、多くの遺跡が新たな開発によって消えてしまうため、埋蔵文化財として調査が行われている。現在、冒頭で家康が「関東には未来がある」と語った関東地方でも多くの遺跡において発掘調査が行われ、そして新たな開発によって姿を消している。

江戸遺跡の発掘調査は、東京の開発とともに発掘調査件数も増加し、現在では資料や研究成果も多く蓄積されている。また、東京以外の地域においても江戸時代の遺跡が発掘調査され、多くの成果が挙がっている。

第一話に関連すると思われる発掘調査としては近年、埼玉県で利根川東遷事業に関わる可能性が想定される利根川の堤防遺跡が発掘調査されている。

また、第三話に関連しては、本書で取り上げられた神田上水と並び、江戸二大上水のもう一方である玉川上水の羽村取水口から浅間橋(面積47.8ha、延長約30.4km)が平成十五年(2003)に国史跡に指定されている。その後、都市計画道路の整備に伴い玉川上水に橋架を行う必要から、史跡の現状変更に伴って発掘調査が行われている。水から江戸を守るために築かれた堤防と良質な水を江戸に引くために築かれた上水道という水に関わる施設でありながら相反するともいえる遺跡が調査されており、江戸の水事情について、今後さらなる調査や研究が期待される。

第四話に関連しては、平成二十八年(2016)に静岡県伊東市の「江戸城石垣石丁場跡」が国史跡に指定され、それに関連しての調査・研究が進められている。また、第五話にも関わるが江戸城跡も昭和三十五年(1960)に特別史跡に指定されている。

「物言わぬ資料」と言われる考古資料が発掘調査・研究によって雄弁に語ってくれるようになってきたことで、発掘調査・研究による成果が小説や漫画、映画やドラマといったフィクション物の時代考証に生かされることも多くなってきたといえる。しかし、発掘調査の成果を広く周知しなければ、数多の情報の中に埋没してしまい生かされることもなくなってしまう。

本書は、発掘調査の成果を社会に還元していくことが大切であるということを改めて考えさせられた一書であった。

アルカ通信 No.163

発行日	2017年4月1日
企画	角張淳一(故人)
発行所	考古学研究所(株)アルカ 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15 TEL 0267-25-0299 aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp